門前春駒まつり

　春駒は、古く明治時代から門前地区に伝わる民俗行事で、その伝えは隣の白沢村岩室に住む旅芸人の親子が、吉祥寺境内にある養蚕の守護神「金甲稲荷神社の祭日」にちなんで門前地区を訪れ、養蚕の繁昌を祈る歌と踊りを披露したのが始まりとされる。

　ところが、ある年、旅芸人が病いにかかり、来られなくなってからというもの、養蚕が大不作となってしまった。そこで、大正時代に青年団・門前分団の若者が唄と踊りを習い始め、旅芸人に代わって養蚕の繁昌を祈るため、門前地区の家々を巡り、歌と踊りを引き継いだとされる。

　昭和４０年代に中断した時期もあったが、春駒保存会がつくられ、現在まで継承されている。この保存会は現在、門前地区在住で家の長男・世帯主の１３名の若者で構成されている。毎年、新人が入るたびに、それぞれの役が「むすめ」、「おっかあ」、「おっとう」の順に上がり、役員を経て、卒業することができる。

　春駒まつりは吉祥寺境内にある養蚕の守護神「金甲稲荷神社」の祭日や、２月の初午の日に行われていたが、平成元年から現在に至るまで、祝日にあたる２月１１日（建国記念の日）に行われている。

　おっとう（父親）１人、おっかあ（母親）１人、踊り子（娘）２人の４人で１組を構成する。２組で門前地区約１３０戸を唄と踊りで半々に回る。

　春駒当日の一日は長い。午前１時頃に門前集会場に集合。婦人会の方々等の協力を得て、女装の化粧や着付けが始められる。「おっかあ」は、かつらに姉さんかぶり、「踊り子」は紫のおこそずきんをして、それぞれ借り物の晴れ着を着る。

　午前５時３０分頃、集会場を出発。午前６時に吉祥寺で踊った後、まだ夜も明けぬうちから、桑の枝で団扇太鼓を鳴らしながら家々を訪れはじめる。

　唄は「おっかあ」と「むすめ」の掛け合いで歌う。「おっかあ」は、縁側で桑の小枝で団扇太鼓をたたきながら、「むすめ」は茶の間にあがり、小さな馬の作り物を右手に持って、踊りながら歌う。歌詞がとても長い春駒の唄は、旋律が同じで、サビがないので、暗記するのに一苦労する。「おっとう」は一軒一軒、祝い金やコップ酒の日本酒を頂くなどのおもてなしを受ける。相当量のお酒を飲むので、途中、「おっとう」がリタイアする年もあった。

　歌い終わると、「むすめ」の持つ布に飾り付けられた五色の色紙（現在は金色のみ）を、「おっかあ」の持つ桑の小枝にくくり付けて家人に渡す。家人はこれを神棚に祀ってあるオシラサマ（蚕神）に供えた。

　すべての家を廻り終わるのは、夕方の４，５時頃。大変タフなまつりである。